アポレンカはいかにして日本にやってきたのか

Jak Apolenka do Japonska přišla

～絵本**『藍染めのアポレンカ』**ができるまで～

小川里枝
（チェコ工芸研究家・ヴィオルカ主宰）

私は「ヴィオルカ」というブランドを主宰し、チェコの藍染めを日本に紹介・普及するという仕事を２０１４年よりはじめました。２００年以上の歴史を持つ伝統工芸品を使った現代の日本の暮らしに溶け込むプロダクトを提案することで、チェコで染められ続けてきた藍染めの存在だけでなく、工芸品としてのポテンシャルを感じてもらおうという理念の基に活動を続けています。

絵本『藍染めのアポレンカ』に出合ったのは、ヴィオルカの活動開始から６年の２０２０年のことでした。それはコロナ禍のはじまった年であり、世界中の人々が得体の知れない新しいウィルスに対してなすすべなく、人と人との接触が極端に制限され、ほとんどの人がネットを通して仕事やコミュニケーションをしていた時期でした。

その初夏のある日、赤毛の女の子のアイコンが「ヴィオルカ」のアカウントに「いいね！」をしてくれました。なんてかわいらしいイラストだろうと思わずそのアイコンをタップすると、『Apolenka z modrotisku』という藍染めをテーマとした絵本がこの１０月に出版されますとの投稿が目に飛び込んできました。すぐにそのアカウントに「出版される絵本を日本にも送ってもらえますか？」とメッセージを送りました。これが絵本の原作者、ロマナ・コシュトコヴァーさんとのはじめての出合いでした。

ロマナさんからは、「私たちはこの絵本をチェコだけでなく、もっと広い世界の読者に届けたいと思っています。もしよかったら手伝ってもらえませんか？」というお返事をもらいました。彼女とはその後も連絡を取り合い、この年の終わりには無事に絵本が日本にも届きました。原書をはじめて目にし、ヴェロニカ・ヴルコヴァーさんによるイラストレーションの美しい藍の色と質感の表現に目を奪われ、心

が震えました。期待以上の美しさに、その時にはもう、この絵本を日本で必ず出版しようと心に決めていました。ロマナさんからも数か月のメール交換を通して、日本語への翻訳をお願いしたいとの言葉をもらっていましたから、翻訳と出版が私の宿題になりました。



『藍染めのアポレンカ』(求龍堂 2023 年)表紙

その後、この絵本の意義を即座に理解し、出版にご尽力くださった求龍堂の編集者、三宅奈穂美さん、和田寧路さんに出会えたことは幸いでした。おかげで日本での出版が一気に現実化したのです。さらに絵本の帯に紬織の重要無形文化財保持者（人間国宝）である志村ふくみ先生から推薦のお言葉を、そして　在日チェコ共和国大使館のマルティン・クルチャル特命全権大使からご挨拶をお寄せいただき、日本を代表する染織作家と駐日チェコ大使による言葉が、両国の藍染めの技をさらにしっかりと結びつけてくださいました。

『藍染めのアポレンカ』の魅力は、制作の背景、物語、イラストレーションなど、挙げればきりがありません。私にとっては、私以外にも古い手仕事に何とか目を向けてほしい、この手仕事が消えないで欲しいという志を持って努力をしている人がチェコにもいたという驚きでした。そしてその想いをこのように美しい作品に昇華したという事実が、出版にこぎつけるための原動力にもなったのです。

ロマナさんによると、藍染めをテーマにした絵本の構想を温めていた頃、すでにいくつかの絵本や詩集の挿絵を手掛けていたヴェロニカさんと出合い、すぐに意気投合して制作のための調査に取り掛かったそうです。描かれた藍染め工房を見て、実際の工房に取材していることが見てとれました。防染用の糊を布に置くための長い作業台、青や白の布が天井の梁からたくさん吊るされている様子。私もコロナ禍前に何度も通っていたので、水を大量に使う工房のひんやりと少し湿った感じや、独特な藍のにおいまで漂ってくるように感じました。ほかにも工房で飼う猫やニワ

トリが描かれている様子から、職人の家族からも丁寧に話を聞いたことがわかりました。余談ですが、工房で飼っていたニワトリがある日うっかり藍甕に落っこちて、頭からしっぽまで真っ青になったという工房で聞いたちょっと可笑しな逸話は、私のお気に入りです。

ロマナさんとヴェロニカさんは、見開きのページごとにテキストにふさわしいモティーフを決め、ヴェロニカさんがひとつひとつの細部を描き、さらにコンピュータソフトを使ってレイアウトし、色あいを細かく調整してイラストレーションを仕上げたそうです。私は翻訳をはじめるにあたり、アポレンカの髪の色はどうして赤なのだろうと疑問を持っていました。ある時、ロマナさんにその理由を訊くと「私の知っている赤毛の女性や女の子は、たくましくて、少しおませで、同時に勇気があり、弱い者を守り、意志がとても強いのです。だから私は主人公を赤毛の女の子にしたいと思っていました。ヴェロニカに相談したら彼女も賛成してくれました」と返ってきました。この返事からふたりが様々なアイディアを出しあいながら、物語とそれを彩る挿絵の構想をどんどん膨らませていったことが手にとるようにわかりました。そして、この絵本をより魅力的に感じたと同時に、がんばり屋さんで、勇気のある少しおませな女の子、アポレンカがどんな風に日本語でおしゃべりするのか、わかったように思いました。

実際のイラストレーションは A4 判ほどの白い紙に水彩で描かれています。この水彩画から琳派の画家による「たらし込み」を連想しました。これは墨のにじみを生かした絵画の技法で、墨が完全に乾ききらないうちに濃度の異なる墨や絵具で描き足すと、両者が混じりあって、質感のある独特のむらむらとしたにじみ感が自然に生まれるというものです。江戸時代初期の画家、俵屋宗達がこの技法を用いはじめ、のちに尾形光琳らに受け継がれて琳派の画家たちの重要な技法となりました。挿絵に多く用いられているにじみの表現は、デリケートでやわらかなヴェロニカさんの作品特有のものとなっており、布やドレス、水面や地面、草むらや背景などに繰り返し用いられています。アポレンカがはじめておじいさんに連れられて藍染めの工房を見るシーン（表紙にも使用）では、画面いっぱいに広がる布の立体感や質感を表す写実的な効果があるだけでなく、平面的な画面に抑揚を与える装飾的な効果も見られます。この画法をヴェロニカさんがどのように自分のものにしたのかと

ても興味があり、彼女の略歴をたどっていくと、伝統的な絵画を学ぶために中国・北京に半年間留学して中国画を学ぶクラスに入り、帰国時には画集をたくさん持ち帰って画法を研究したことがわかりました。中国画では輪郭線を用いずに墨の濃淡だけで表す画法がありますが、ヴェロニカさんもそれらを参考に、濃淡のグラデーションの中ににじみの模様をつくる独自の手法を考案したようです。水をたっぷり含ませた絵の具で描くには長い時間がかかります。ひとつひとつのモティーフを描いたうえでコンピュータに取り込みレイアウトしたイラストレーションも、藍染めと同様に時間をかけた根気のいる仕事です。それがこの絵本に深みや厚みを与えていることがわかっていただけると思います。この絵本は、２０２０年、チェコ・グランド・デザインのグラフィックデザイン部門の最優秀賞を受賞しました。

翻訳の作業にもやはりひと手間かかりました。チェコ語にも藍染めに関する特有の言葉があります。その言葉を日本語に置き換えるために日本の染工場や工房に行って話を聞かせていただきました。その一方、bílá káva（ビーラー・カーヴァ)という焙煎した麦で淹れた代用コーヒーに牛乳と砂糖を加えたものや、sváteční koláč(スヴァーテチニー・コラーチ）といわれる、日常の主食の黒パンやイモでなく、昔は高価だった白い小麦粉を使って日曜日やお祝いごとの際に焼くケーキなどのチェコ語を日本語にしてゆくことも楽しいものでした。訳語はぜひ絵本をご覧ください！

２０２４年２月、モラヴィアのロマナさんが住む村で彼女とはじめて会うことができました。長い間メール交換していた時に感じていた通り、明るく快活な人でした。そしてこの絵本を完成させた芯の強い人でもあります。滞在中、ズリーン市にあるバチャ・インスティテュートで開催されていた「伝統と現代デザインにおける青」展に、ヴィオルカのウェア作品と『藍染めのアポレンカ』がともに藍染めをモティーフにした現代のデザインの一例として展示されているところも見ることができました。



「伝統と現代デザインにおける青」展の会場で原作者と筆者

そして絵本が日本で出版されたことをロマナさんとふたりのイラストレーター（本作を共作したイラストレーターのヤン・シュラーメクさん）だけでなく、出版元であるホドニーン市美術館の館長さんをはじめとする館員のみなさん、工房の職人さん、藍染めにかかかわる各方面の方々、ロマナさんのご家族にまでとてもよろこんでいただけたことを直接に知り、心から幸せに思いました。

『藍染めのアポレンカ』は２０２３年１１月、無事に独り歩きをはじめました。今後もこの絵本が日本の読者の心を捉え、チェコの藍染めを知るきっかけとなり、また広く長く伝統的な手仕事を受け継ぐ大切さを伝えていってくれることを期待しています。

筆者略歴＊小川里枝（おがわ　りえ）



チェコ工芸研究家、ヴィオルカ主宰。成城大学大学院文学研究科美学美術史専攻博士課程前期修了。高崎市美術館で「ボヘミアガラスの 100 年展」を学芸員として担当した後、４年間プラハに滞在。帰国後、チェコ共和国大使館勤務、チェコ美術の展覧会の開催準備、主にカタログの翻訳に携わった。共著に『チェコを知るための６０章』（２０２４年　明石書店）、訳書に絵本『藍染めのアポレンカ』（２０２３年　求龍堂）がある。

https://www.violka.jp/ogawa